

10年たてば関東地方ではクヌギ、コナラの雑木林、80～100年たてば武蔵野台地ではシラカシの照葉樹林に遷移してゆく。もう踏むのやめて1年たったオオアレチノギク・ヒメムカシヨモギ群落の中では、あれほど強かったオオバコやスズメノカタビラは姿を消してしまう。日本の農民の長い間の性といわれるような夏の水田の田の草取り、あるいは梅雨期以降あつというまに畑地を被ってしまうメヒシバ、ハコベ、イヌビエなどの雑草群落は、もっともやっかいで、手ごわい相手である。しかし、それは農民が畑をたがやし肥料をやり、作物を作り、除草をしている限り数100年間も嫌がられながらも、農民と共存してきた。作物は毎年植えかえなければならなかったが畑の雑草は草を取り、肥料をやる限り畑の主として存続してきた。水田も同様である。もっとも生態学的に

確実な畑の雑草、水田雑草を完全に除去する方法、それは草をとるのをやめること、耕作を放棄することである。あれ程農民を困らせている畑の雑草も管理を放棄して、半年ないし1年たてば夏は25日～30日で芽が出、生長し、花を咲かせ、実をみのらせて一生を終る短期1年生畑地雑草から生活環が180日以上かかる越年生の路傍のオオアレチノギク、ヒメムカシヨモギに代る。さらに1～2年放棄したままでは多年生のススキ、チガヤ、クズなどの草本群落に代る。そしてあれほど農民を苦しめていた畑の雑草はまったく姿を消してしまう。

雑草群落の動態こそ、植物的自然と人間活動との様々なかかわりあい、相克の縮図といえよう。

(横浜国立大学)

その名は親泊千代

和田 明子

私がベルギーの地域開発とその経済地域構造について、講義の一端を担当したのは、昨年10月下旬からでした。講義をおえたある日、「非常勤の方は、かならず“お茶の水地理”に随筆をおよせいただくことになっているのです」という編集委員のお話でした。あれこれ考えたすえ、やはりこのことは、ぜひお伝えしたいと、一筆加えさせていただくことにしました。

1947年の春、私は東京女子高等師範学校の文科に入学しました。東上線の大山駅から、女高師寮までは一面の焼野原で、寮が駅から手にとる近さにおもわれました。当時は終戦直後、伝統的な全寮制のなごりのために、クラスのひとつの方が寮生でした。全国各地から集った才女たちは、それぞれに郷里の生活ぶりを披露し、誇らかに語りあったものでした。

奄美出身のMは、戦前に鹿児島に疎開したままで、いつ大島に帰れるのかわからないと嘆いていました。アメリカ占領下の奄美大島はもとより、沖縄島をふくむ南西諸島の島じまのことは、皆目事情がわかりませんでした。

そんなとき、耳にしたのが、沖縄出身の地歴専修の先輩、その名は親泊千代さんのことでした。髪が黒く、うるんだ丸い瞳、いつも手踊りでみんなを笑わせ、琉球民謡をうたってくれた人、ひょうひょうとして屈託のない人、その方は、いまどうしていらっしゃるのか……。焼夷弾で焼けおちた護国寺寮を心に描きながら、私たち寮生は、その人の面影をうつろに追ったものでした。

1965年10月、アメリカ大使館でパスポートをもらいうけた私は、はじめて沖縄の地に足をおろしました。日本地理学会の沖縄巡検に参加したのです。会員は、2日目、南部戦跡に案内されました。20年前の摩文仁岳は残暑なおきびしく、山肌は南国の陽にぎらぎらと輝き、大地は焼け、屋台にみやげ物をならべた老婆の顔に、かつての戦いのはげしさが刻まれていました。戦士を弔う県碑も1つ2つと、ようやく建立されはじめた頃で、多くの洞窟が、沖縄戦の戦後を露呈していました。すでに映画「ひめゆりの塔」に、ふかく心打たれていた私は、さっそく第3外科壕跡をたずね、ひめゆり部隊の女子生徒のご冥福を祈りました。女子生徒は、私と同学年で、もし、本土が決戦場になっていたら、私とてどのような運命に遭ったかもしれない、こんなおもいがより身近に彼女らを悼み、ひたすら「ひめゆりの塔」へと私をむかわせたのでした。石碑にとどめられた殉死者の女子生徒の名を順に追って、そこに私は「親泊千代」の名を見出したのでした。県立第一高等女学校職員戦死者のさいごに、一瞬、ハット胸をつかれるおもいがしました。たしか女高師寮でお名前をおききした方、その方が……。

親泊千代さんのクラスメート・辻千鶴さんは「伊原野に死す——ひめゆり部隊・親泊千代の霊に捧ぐ」(交陽社、1980年6月)で、「化粧らしいものを全くせず、やや浅黒い顔に濃い眉と潤んだような瞳をした」千代、「好きでたまらなく、ひとりである時も千代のことをおもう

と胸が熱くなり、顔がほてってくるような」と千代さんのありし日をしのんでいます。その千代さんの喪にふくし、喪を語ったこの書物は、千代さんとともに行動した第一高女生、また、傷病兵とその看護の女子生徒をけなげに指揮しつづける千代さんを「悲母観音」と讃えた三村上等兵、その彼をシテ役にして沖繩戦の最後を精緻に描き、焦熱地獄のなかでもがき苦しみ死んでいった第三外科壕「ひめゆり部隊」の乙女たちの鎮魂を歌いあげています。

辻さんは、第2回目の沖繩訪問記を桜蔭会報によせら

れています。にもかかわらず、私がここであらためて親泊千代さんについて記すのは、私たちの先輩に第二次大戦の捨て石になられた方がいらしたと、そして、戦後40年、いまや防衛費のG.N.P.比1%枠問題がゆれるなかで、沖繩戦が風化しようとするとき、ひめゆりの塔から親泊千代さんは、なにを叫び、なにをさし示しているのか、あらためて自分自身に問いかけ、考えなおさなければならぬからにはほかなりません。

(都留文科大学)

セイシユルのマーケットで

岡田 久美子

先年、東アフリカへの途次、たった一日だけ立ち寄ったセイシユルの印象が未だに鮮かなので、そのことを少し述べてみたい。

資料には「地上最後の楽園」云々と、うたわれているセイシユルの島々。過度の期待は自ら失望を招くもと、との危惧はあっても、未知の土地への憧れは次第に膨らみ、BAヨハネスバーグ行きにいそそと乗り込む。

夜景きらめくホンコンと、蘭の花々に溢れたコロンボを経由した機は、照明の乏しい、至ってお粗末な空港に着陸。そこで期待の第一歩を出迎えたのは、何と迷彩服に小銃の兵士の姿であった(この少し後にクーデター未遂騒ぎ)。

暑い。それもひどく、尤もここは南緯4度の小さな島、蒸し暑いのは当然としても、今は真夜中。教室で「熱帯では年較差は小さいが日較差なむしろ大きく、日中に比べて夜は涼しくなる」などとしゃべっていたことがそら恐ろしい。

ゆっくりと廻る天井吊の扇風機の下で、ゆっくりとした空港作業員の仕事をただひたすらに待つ、佻しく暑い「楽園」の夜であった。

ところが翌朝、外が明るくなって眼覚めると、滲としたインド洋が眼下に拡がり、リーフ特有の透明なエメラルドグリーンがキラキラと踊っている。椰子の葉越しにこぼれる朝日は、繊細な黄金の縞模様を描き、水平線の真白な雲は、碧い空をますます碧いものにしていく。

そしてこの広い広い浜辺に、人影が無い——。椰子の木と木の間に吊ったハンモックに揺られ、潮の香と鳥の声の中でブーゲンビリヤの花を愛でれば、昨夜のことどもは雲散霧消、今はまさに「楽園」に遊ぶ心地である。

清澄な空気は健康な食欲を誘うが、それを充たしてくれるのは、地元クレオール料理。これは素材、味つけ共に日本人の舌に快よい。魚介類と果物の豊富な食卓に満足し、主婦本能に基いて、主都ビクトリア最大のマーケットを覗いてみる。魚の売場には、驚いたことに氷もなければ冷蔵庫もない。早朝水揚げした魚は午前中に売り捌いてしまう由で、逆にいえばそれくらいしか獲ってこないのだ。しかし独特の、かなりの臭気が鼻をつく。大きな太刀魚に似た魚が、筒切りにされて紐を通して吊下げである。小鯛のような魚は、数匹まとめて葉つきの小枝に通し、これもそのままぶら下げて帰れるようになっている。

日用雑貨の売場に行ってみると、日本ならどんな少額の買物でも無雑作に入れてくれるビニールの白い袋、あれがここでは立派な売物に。すり鉢は?とキョロキョロしていたら、店番が愛想よく英語で話しかけてきた。日本人と分ると、彼の持ち合わせている日本の知識の全てを披露してくれた。曰く、「ホンダ、ソニー、ヒロシマ」考えてみると、この取り合わせ、中々どうして意味深いものがある。

セイシユルには、花崗岩の山々と珊瑚礁が織りなす変化ある地形、Af気候に育てられた巨大なココデメールや象亀、複雑な植民地支配の名残りから、ゲルマン系とラテン系の交錯する風俗等々見るべきものが多い。しかし私は、先の言葉を現住民から直接聞いたことだけでも、この島を訪ねた意味があったように思う。

地理学の徒は、他のことは儉約しても旅費に貯えを投じたい。この当然のことを、いま改めてこのマーケットの強烈な匂いの中で認識したのであった。